

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

まとめ

論文の内訳	本数	英和の別と筆頭の別	
学術論文	79編	英語論文	52編 (うち筆頭著者 24編)
		日本語論文	27編 (うち筆頭著者 8編)
総説論文	17編	日本語論文	17編 (うち筆頭著者 6編)
著書 (分担執筆)	15編	英語論文	10編 (うち筆頭著者 7編)
		日本語論文	5編 (うち筆頭著者 1編)
(論文総計)	111編	英語論文	62編 (うち筆頭著者 31編)
		日本語論文	49編 (うち筆頭著者 15編)

学会発表	内訳	
国際学会発表	39回 (うち筆頭演者 16回)	
国内学会発表	国内学会一般演題発表	78回 (うち筆頭演者 18回)
	地方学会発表	27回 (うち筆頭演者 2回)
	シンポジウム・特別講演等	5回 (うち筆頭演者 1回)

★学術論文・総説論文・著書について内容の概要を記した。

★学会発表は上表の如く回数をまとめた。

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

(1) 学位論文

著者名（記載順）	波江野力
題名（和文題名）	肝癌切除術後の早期再発の本態に関する実験的研究
雑誌名（巻・頁・年）	北海道医学雑誌、64：630-641, 1989
学位論文作成の計画	臨床上的の問題点を解決すべく、仮説の設定・実験計画策定・実験の施行・実験結果の評価と分析・文献検索・論文作成（学会発表含む）
内容概要	ヒト肝癌術後の早期再発の原因を検索する目的で、ラットの肝部分切除が皮下移植肝癌の増殖を促進する機序を、宿主の術後免疫能の変動、estrogen receptor の関与、液性因子について実験的に解析した。その結果、肝部分切除後 24 時間目のラット血清をゲル濾過して得られた分子量約 10 万強の血清分画に存在する液性因子が肝細胞および肝癌細胞の増殖をともに促進した。肝切除後誘導される液性因子が肝癌の早期再発に関与しているものと考えられた。

(2) 学術論文

1	著者名（記載順）	Hata Y, Sasaki F, Alam S, Koike Y, <u>Namiemo T</u> , Igarashi M, Nojima T
	題名（和文題名）	Solid and cystic tumor of the pancreas in a child
	雑誌名（巻・頁・年）	Pediatric Surgery, 4: 303-305, 1989
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	小児における膵の嚢胞性疾患は稀であり、かつ本質的に良性の疾患である。診断は現状では臨床的に困難であり、組織化学検査・電子顕微鏡でなされるが臨床的診断（特に、一般的画像検査）が可能になることが待たれる。
2	著者名（記載順）	Hata Y, Sasaki F, Igarashi M, <u>Namiemo T</u> , Takahashi H, Uchino J
	題名（和文題名）	Pancreatic hormone changes in infantile obstructive jaundice
	雑誌名（巻・頁・年）	Acta Paediatrica Japonica, 32: 27-31, 1990
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	幼児の閉塞性黄疸における膵ホルモン障害について実験的および臨床的に検討した。実験的には、総胆管の結紮で血漿インスリンは対象に比較して緩徐に上昇するが、血漿グルカゴンは結紮後 4 週目で顕著に上昇した。臨床的には、肝の障害が亢進するにつれグルカゴン値の上昇がみられた。
3	著者名（記載順）	Omote Y, Hosokawa M, Komatsumoto M, <u>Namiemo T</u> , Nakajima S, Kubo Y, Kobayashi H
	題名（和文題名）	Treatment of experimental tumors with a combination of a pulsing magnetic field and an antitumor drug (磁場と抗癌剤の組み合わせ治療による抗腫瘍効果)
	雑誌名（巻・頁・年）	Japanese Journal of Cancer Research, 81: 956-961, 1990
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)論文の校閲・全面改定

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	内容概要	磁場 (PMF) の影響と抗癌剤 (マイトマイシン C) の組み合わせで抗腫瘍効果の発現があるか否かを実験的に検討した。PMF+MMC の組み合わせ治療は、他の単独治療群に比較して有意に抗腫瘍効果を認めた。
4	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Takeichi N, Hata Y, Uchino J, Kobayashi H
	題名 (和文題名)	Kinetic changes of liver regeneration and hepatocellular carcinoma cells partial hepatectomy in rats (肝切除術後の肝再生および肝細胞癌の増殖の動態)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Gastroenterologia Japonica, 26: 29-36, 1991
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	肝部分切除がラットの皮下移植癌 (肝癌・線維腺腫・乳癌の各細胞系) の増殖に影響するか否かについて実験的に検討した。肝切除術の影響は、移植肝癌のみに現出し腫瘍径測定では 36 時間目に最高値の増殖を来した。また、腫瘍片の細胞分裂数からも裏づけされた。
5	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Hata Y, Uchino J, Kondoh H, Shibata T, Satoh T
	題名 (和文題名)	Spontaneous rupture of intrahepatic artery aneurysm with complicated vas anomalies (複雑な血管異型を有し肝内動脈瘤が自然破裂した例)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Gastrointestinal Radiology, 16: 172-174, 1991
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	肝内動脈瘤の自然破裂を来した症例を経験したので報告した。CT で肝皮膜下血腫を伴った像を認め、腹腔動脈造影では肝右葉内の肝動脈の破裂と肝外肝動脈瘤・胃十二指腸動脈の閉塞・脾動脈の異常血流を認めた。また、門脈は本幹が閉塞し側副血行が著明であった。
6	著者名 (記載順)	Hata Y, Sasaki F, Naito H, Takahashi H, <u>Namieno T</u> , Uchino J
	題名 (和文題名)	Late recurrence in neuroblastoma (神経芽細胞腫の晩期再発)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Journal of Pediatric Surgery, 26: 1417-14 19, 1991
	分担内容	(E)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	神経芽細胞腫の寛解後長期のフォローで再発することは稀であるが、このような症例を経験したので文献検索を含めて報告した。播種性の再発を認めることが多く長期再発を念頭に入れたフォローアップが必要である。
7	著者名 (記載順)	Hata Y, Yoshikawa Y, Une Y, Sasaki F, Nakajima Y, Takahashi H, <u>Namieno T</u> , Uchino J
	題名 (和文題名)	Liver regeneration following portacaval shunt in rats: 3',5'-cyclic AMP change plasma and liver tissue (門脈大動脈シャント後の肝再生：血漿中および肝内の 3',5'-cyclicAMP の変化)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Research in Experimental Medicine, 192: 131-136, 1992
	分担内容	(E)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	門脈大動脈シャント後の肝再生を血漿・肝組織内の cAMP の変化から評価した。cAMP は術後低値になるが 2 週目には回復し、肝再生も術後には著明に減少するが 2 週目までは再生が継続していた。

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

8	著者名（記載順）	Hata Y, Takada N, Sasaki F, Ishimura H, Wakisaka Y, Hamada H, <u>Namieno T</u> , Takahashi H, Uchino J
	題名（和文題名）	Effects of hyperthermia on multidrug-resistant human hepatocellular carcinoma (多剤薬物耐性のヒト由来肝細胞癌に対する温熱療法の抗腫瘍効果)
	雑誌名（巻・頁・年）	International Journal of Oncology, 2: 1013-1015, 1993
	分担内容	(E)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	多剤薬物耐性のヒト由来肝細胞癌に対する抗腫瘍効果を温熱療法、抗癌剤(アドリアマイシン)の単独あるいは両者の治療法で評価した。その結果、温熱療法は抗癌剤の抗腫瘍効果を促進することが判明した。
9	著者名（記載順）	Hata Y, Inoue T, Une Y, Sasaki F, Takahashi H, Ishimura H, Ogasawara K, Nishibe M, Baba E, <u>Namieno T</u> , Shiroto H, Uchino J
	題名（和文題名）	'Streamline' phenomena in liver metastasis of gastrointestinal tumor: experimental study using rats (消化管腫瘍の肝転移を来たす血流：ラットを用いた実験的研究)
	雑誌名（巻・頁・年）	Oncology Reports, 1: 125-127, 1994
	分担内容	(E)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	消化管腫瘍の血行性肝転移が実際に“血流”説に符牒しているか否かを検証した。腫瘍細胞を上腸管膜動脈・下腸管膜動脈・脾動脈から投与して、腫瘍塊を病理学的に調べると、腫瘍細胞の分布および増殖は投与部位によって相違しており血流説を裏づける結果が得られた。
10	著者名（記載順）	<u>Namieno T</u> , Takeichi N, Hata Y, Uchino J
	題名（和文題名）	Diagnostic significance of liver failure after newly-appeared serum fraction following liver surgery (肝手術後の肝不全を予測させる新規出現する血清分画の診断的意義)
	雑誌名（巻・頁・年）	Oncology Reports, 1: 457-460, 1994
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	肝炎・肝癌を自然発症する LEC ラットでは、肝不全を来たと血清分画に異常なピーク値が出現し早晚死に至るという現象を観察していたが、これは肝不全を示唆する血清マーカーと考えられた。そこで、肝切除術後の患者のマーカーと術後予後との相関を調べたところ実際に符牒した。
11	著者名（記載順）	<u>Namieno T</u> , Kondo Y, Higashi T, Takahashi M, Gotoda A, Takahashi N, Terai T, Sato T, Murashima Y, Uchino J, Koguchi K
	題名（和文題名）	Eyelid metastasis originated from gastric cancer (胃癌を原発とする眼瞼転移)
	雑誌名（巻・頁・年）	Oncology Reports, 1: 801-804, 1994
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	胃癌からの眼瞼転移は極めて珍しく、文献的にも 6 例のみであった。5 例が男性であり、4 例は低分化型の癌であった。この転移は癌末期を反映していることが考えられ、注意深い観察が必要と思われた。

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

12	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Hata Y, Uchino J, Matsubara I, Tedo I
	題名 (和文題名)	Blunt liver trauma: A new concept for classification of liver trauma based on v injury
	雑誌名 (巻・頁・年)	International Surgery, 79: 52-59, 1994
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	鈍的肝外傷 (成人：100 名、小児：43 名) の病態を検討し合理的治療法を模索した。予後は出血制御の可否で決まるため、血管損傷に基づく新しい肝外傷分類を作成した。I=肝被膜下損傷、II=経肝被膜損傷、III=流入/流出血管損傷に 3 大分類し、それぞれに 2 亜分類した。頻度は II>I>III であり、死亡率は II>III>I の順であった。治療法は I では経過観察、II では小～中等度の手術 (down staging)、III では血管再建の必要性があった。
13	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Kawata A, Sato N, Kondo Y, Uchino J
	題名 (和文題名)	Age-related, different clinicopathologic features of hepatocellular carcinoma patients (肝細胞癌患者は年齢と関連した異なる臨床病理学的特徴を有する)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Annals of Surgery, 221: 308-314, 1995
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	肝細胞癌患者 428 名の臨床病理学的相違を世代別 (若年者：20～49 歳、中年者：50～69 歳、高年者：70 歳以上) に分けて調べた。その結果、HBsAg 陽性率と AFP 値は若年者で高値、肝障害の程度や肝硬変合併率は高年者で高率であった。中年者はいずれも両群間に位置した。HBsAg 陽性率と AFP 値、肝障害の程度と肝硬変合併率との間には相関があった。肝癌の発症には世代的因子が存在し、その原因・過程は異なる可能性を示唆した。
14	著者名 (記載順)	Kawata A, Une Y, Hosokawa M, Wakizaka Y, <u>Namieno T</u> , Uchino J, Kobayashi H
	題名 (和文題名)	Adjuvant chemoimmunotherapy for hepatocellular carcinoma patients (肝細胞癌患者の補充化学免疫療法)
	雑誌名 (巻・頁・年)	American Journal of Clinical Oncology, 18: 257-262, 1995
	分担内容	(E)資料の評価・分析 (F)論文の校閲・全面改定
	内容概要	肝切除術後の患者の予後改善のために、養子化学療法群と化学療法単独群との間で比較検討した。その結果、生存率は 2 群間に有意差はなかったが、切除縁 free の手術例のみに限定すると 2 年生存率は養子免疫群で良好であった。
15	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Koito K, Uchino J
	題名 (和文題名)	Doppler color flow imaging for assessment and localization of pancreatic insulinoma (カラードップラー法による膵インスリノーマの血流評価と存在診断)
	雑誌名 (巻・頁・年)	European Journal of Radiology, 20: 208-209, 1995
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	膵ラ氏島腫瘍の血流評価に超音波内視鏡下カラードップラー法の可能性を評価した。超音波内視鏡カラードップラー法は腫瘍内部の血流が検出可能であり、ラ氏島腫瘍の存在診断の一助となる。また、一般的に膵腫瘍性病変の血流評価に有用な検査法になり得ると考えられた。
16	著者名 (記載順)	Ishizaki A, Koito K, <u>Namieno T</u> , Nagakawa T, Murashima Y, Suga T

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	題名 (和文題名)	Acinar cell carcinoma of the pancreas: A rare case of an alpha-fetoprotein-producing cystic Tumor (膵腺房細胞癌：稀な、アルファフェトプロテイン産生性の嚢胞性腫瘍)
	雑誌名 (巻・頁・年)	European Journal of Radiology, 21: 58-60, 1995
	分担内容	(B)研究の統括 (F)資料の評価・分析 (C)論文の校閲・全面改定
	内容概要	AFP 産生性の膵線房細胞癌は稀な腫瘍であり、教育的意義を認めたので報告した。画像上、中心に嚢胞を形成した腫瘍であった。
17	著者名 (記載順)	Koito K, Nagakawa T, Murashima Y, Suga T, Yaosaka T, Imamura A, Fujinaga Miyakawa H, Tochihara M, Higashino K, Sato T, Natsui K, Ambo T, Sato Yamaguchi K, Kato S, Goto M, <u>Namieno T</u>
	題名 (和文題名)	Endoscopic ultrasonographic-guided punctured pancreatic ductography: An initial and successful trial (超音波内視鏡的主膵管穿刺造影法：最初の成功例)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Abdominal Imaging, 20: 222-224, 1995
	内容概要	超音波内視鏡下に主膵管を穿刺して膵管造影に成功した症例を報告した。症例は粘液産生膵腫瘍を有し、豊富な粘液のために経乳頭の膵管造影に失敗した。このため超音波内視鏡的に主膵管を穿刺・造影した。
18	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Takahashi M, Koito K, Sato N, Uchino J
	題名 (和文題名)	Surgical procedures in gallbladder cancer with special reference to its macroscopic appearance (胆嚢癌における外科的処置：特に肉眼型との関連において)
	雑誌名 (巻・頁・年)	International Journal of Oncology, 8: 367-370, 1996
	内容概要	胆嚢癌切除 33 例を用いて、肉眼型と壁深達度の関係を調べた。その結果、乳頭型腺癌は全例粘膜層あるいは固有筋層に留まっていたが、他の型は漿膜下層以深に浸潤を認めた。乳頭状腺癌のみが単純胆嚢摘出術の適応になるとの結論を得た。
19	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Sato N, Uchino J, Hosokawa M
	題名 (和文題名)	Postoperative immunocompetence and immunosuppressive effect of rat liver tumor (担癌ラットにおける術後免疫能と免疫抑制)
	雑誌名 (巻・頁・年)	International Journal of Oncology, 8: 785-790, 1996
	内容概要	担癌状態で手術侵襲を加えた場合に免疫能および免疫抑制がどのように動くかについて調べた。免疫抑制は術後 1-3 日および 14 日以降に認められ、しかも担癌状態は免疫抑制に重大な影響を与えた。手術侵襲は腫瘍増殖を促進し潜在的な腫瘍を活性化させる可能性を示唆した。
20	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Konaka S, Okada F, Hamada J, Hosokawa M, Uchino J, Sato N
	題名 (和文題名)	Pathological comparison between spontaneously developed and chemically induced liver cancers in LEC rats with hereditary hepatitis (遺伝性の肝炎発症 LEC ラットにおける自然発生肝癌と化学的誘導肝癌の病理学的比較)

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	雑誌名 (巻・頁・年)	International Journal of Oncology, 8: 791-794, 1996
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	LEC ラットの自然発生肝癌と化学発癌物質 (3'-Me-DAB) で誘発した肝癌との病理学的相違を検索した。その結果、LEC ラットは本来肝癌が誘発し得ない発癌剤濃度 (0.03%) でも肝癌を発症し、自然発症肝癌に比較してその組織学的分化度は低く、転移の頻度や可移植性も有意に高かった。長期生存した LEC ラットは肝癌準備状態にあり、化学発癌物質に対しても感受性が高いことが判明した。
21	著者名 (記載順)	Koito K, <u>Namieno T</u> , Nagakawa T, Morita K
	題名 (和文題名)	Percutaneous transhepatic biliary drainage using color Doppler ultrasonography (カラードップラー超音波法による経皮経肝胆道ドレナージ)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Journal of Ultrasound in Medicine, 16: 203-206, 1996
	分担内容	(E)研究の統括 (F)資料の評価・分析 (G)論文の校閲・全面改定
	内容概要	経皮経肝胆道ドレナージを超音波カラードップラー下に施行する方法を検討した。同法によって脈管と胆管の識別が容易となったため、脈管を避けて胆管の穿刺が可能となり合併症の頻度が低下した。
22	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Uchino J
	題名 (和文題名)	Comparative study of the effects of cyclosporin A and FK 506 on rat hepatocytes cocultured with nonparenchymal liver cells (非肝実質細胞と肝細胞の混合培養に与える影響の免疫抑制剤サイクロスポリン A と FK506 の比較研究)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Transplantation Proceedings, 28: 2987-2990, 1996
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	in vivo で肝再生促進作用を持つと報告されているサイクロスポリン A (CyA) と FK506 を用い in vitro で肝再生作用の有無および毒性を調べた。両者は毒性が強く、肝再生能は対象に比較して極めて弱い。FK506 は非肝実質細胞との混合培養で再生能を回復した。
23	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Koito K, Higashi T, Takahashi N, Kohashi S, Shinohara T, Takahashi M, Yamashita K, Sato N, Uchino J
	題名 (和文題名)	Tumor stage and postoperative survival in invasive colon cancer: Special reference to nodal involvement (浸潤性の大腸癌における腫瘍ステージと術後生存：特に、リンパ節転移との関連)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Oncology Reports, 3: 527-530, 1996
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	大腸癌の予後因子は多数報告されているが、いずれも我田引水の域を出ていない。その中で腫瘍ステージのみが信頼されている。そこで、352 例の切除大腸癌を用いて大腸癌の生存率に関係するステージを調べた。その結果、Ptnm 分類、ポールマン分類、日本の病理学的分類が予後と相関していることが判明した。
24	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Koito K, Higashi T, Sato N, Uchino J

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	題名 (和文題名)	General pattern of lymph node metastasis in early gastric carcinoma (早期胃におけるリンパ節転移の一般的パターン)
	雑誌名 (巻・頁・年)	World Journal of Surgery; 20: 996-1000,1996
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	早期胃癌の縮小手術の選択に当たっては、先ずリンパ節転移の一般的なパターンを知っておくべきであるという考えから、単発早期胃癌 1137 件の自験例を解析した。陽性率は 9.5% (m 癌：2.6%、sm 癌：16.5%) で、癌の肉眼型・分化度・大きさ・深達度との間に相関があった。転移陽性リンパ節の局在は小彎および大彎側に著明で、腫瘍存在部位と関係を有しており、リンパ節転移様式は早期癌といえども進行癌に類似していた。
25	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Sato N, Uchino J, Yamashita K, Hosokawa M
	題名 (和文題名)	Eluted serum relating to growth of both hepatocyte and hepatocellular carcinoma cell (肝細胞および肝細胞癌細胞の増殖に関連した血清分画)
	雑誌名 (巻・頁・年)	International Journal of Oncology, 8: 1195-1199,1996
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	肝再生と肝癌増殖に関連する液性因子を発掘するために、ラット肝部分切除後の末梢血を採取してゲル濾過で分画に分け、bioassay 法で検索した。その結果、分子量 100kDa の血清分画が肝細胞と肝癌細胞の増殖を共に促進した。これは in vivo の実験でも支持された。
26	著者名 (記載順)	Koito K, <u>Namieno T</u> , Nagakawa T, Morita K
	題名 (和文題名)	Balloon-occluded retrograde transvenous obliteration for gastric varices gastorenal and/or gastrocaval collaterals (胃腎シャントまたは胃-大静脈側副血行を有する胃静脈瘤に対する逆行性バルーン遮断下の静脈瘤塞栓術)
	雑誌名 (巻・頁・年)	American Journal of Roentgenology, 167: 1317-1320, 1996
	分担内容	(E)研究の統括 (F)資料の評価・分析 (G)論文の校閲・全面改定
	内容概要	胃腎あるいは胃大静脈シャントを有する 30 名の患者にバルーン閉塞下に胃腎シャントから逆行性に胃静脈瘤に硬化剤を注入する治療法 (BRTO) の成績を評価した。静脈瘤は 1-2 回の BRTO で 4-16 週には完全に消退したが、再発は 12、15、16 ヶ月目に計 3 例 (10%) であった。BRTO の合併症は一過性の血尿と食道静脈瘤の悪化が 10%に見られた。BRTO は胃静脈瘤の治療法として有用と考えられた。
27	著者名 (記載順)	Sato N, <u>Namieno T</u> , Takahashi H, Yamashita K, Matsuhisa T, Aoki S, Uchino J
	題名 (和文題名)	A long surviving patient with repeated recurrences of hepatic alve echinococcosis after traumatic intra-abdominal rupture (外傷性の腹腔内破裂を来し反復再発したにも関わらず長期生存中の肝エキノコクス症の一例)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Journal of Gastroenterology, 31: 885-888, 1996
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文の校閲・全面改定

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	内容概要	腹部打撲にて腹膜炎を惹起し、腹腔内播種の形でたまたま発見された肝エキノコックス患者の長期生存例を報告した。反復した手術とアルベンダゾールの投与で発見後 25 年間の長期にわたって健常コントロールされている。
28	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Koito K, Ambo T, Muraoka S, Uchino J
	題名 (和文題名)	Primary malignant melanoma of the esophagus: Diagnostic value of endoscopic Ultrasonography (食道原発の悪性黒色腫：内視鏡的超音波法の診断的意義)
	雑誌名 (巻・頁・年)	American Surgeon, 62: 716-718, 1996
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	食道原発の悪性黒色腫は稀な疾患であるため、その画像上の特徴は不明瞭であった。その腫瘍は柔らかく、食道造影では腫瘍は隆起性でその輪郭は明瞭であり、内視鏡的には粘膜下腫瘍として認識される。超音波内視鏡的には境界明瞭で、内部構造は腫瘍の大きさで変化することが判った。
29	著者名 (記載順)	Koito K, <u>Namieno T</u> , Nagakawa T, Morita K
	題名 (和文題名)	Splenic artery prior to rupture in the pancreatic pseudocyst: Detection endoscopic color Doppler ultrasonography (膵仮性嚢胞内破裂寸前の脾動脈：内視鏡的超音波法による同定)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Journal of Ultrasound in Medicine, 15: 721-724, 1996
	分担内容	(E)資料の評価・分析 (F)論文の校閲・全面改定
	内容概要	超音波内視鏡下カラー Doppler 法にて、膵仮性嚢胞の外から嚢胞壁を貫通する動脈を認めた。脾動脈の嚢胞内露出を考慮して嚢胞切除術を施行した。病理組織学的には脾動脈の一部が嚢胞壁に巻き込まれており、動脈壁の一部で外膜が欠損していた。放置しておれば、嚢胞内への穿破から出血性ショックの可能性があった。
30	著者名 (記載順)	Shimamura T, Nakajima Y, Une Y, <u>Namieno T</u> , Ogasawara K, Yamashita K, Haneda T, Nakanishi K, Kimura J, Matsushita M, Sato N, Uchino J
	題名 (和文題名)	Efficacy and safety of preoperative percutaneous transhepatic portal embolization with absolute ethanol: A clinical study (純粋アルコールによる術前の経皮経肝門脈塞栓術の有効性と安全性：臨床研究)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Surgery, 121: 135-141, 1997
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文の校閲・全面改定
	内容概要	肝癌切除率の向上のために、肝右葉切除の適応のない 7 名の患者にエタノールによる術前門脈塞栓術を施行し、その安全性と有用性を調べた。その結果、塞栓後 ALT は高値となったが他に顕著な合併症は認められず、非塞栓側の肝臓は施行後 2、4 週で著明に肥大して、4 週目以降には全例で肝右葉切除が可能となった。手術による合併症および予後は非塞栓術グループ 12 名との間に有意差はなく、本法の安全性・有用性が確認された。
31	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Koito K, Sato N, Uchino J
	題名 (和文題名)	Co-cultured endothelial and Kupffer cells regulate hepatocyte replication (内皮細胞とクッパー細胞の混合培養による肝細胞複製の調整)
	雑誌名 (巻・頁・年)	International Journal of Oncology, 9: 737-740, 1996
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	内容概要	肝細胞複製に内皮細胞およびクッパー細胞が関与している可能性を調べた。内皮細胞は肝細胞複製を誘導して促進的に作用し、他方、クッパー細胞は肝細胞複製を抑制することが判明した。また、内皮細胞とクッパー細胞をある比率に従って混合培養すると肝細胞の複製がコントロールされた。
32	著者名（記載順）	Sato N, <u>Namieno T</u> , Takahashi H, Yamashita K, Uchino J, Suzuki K
	題名（和文題名）	Contribution of mass screening system to hepatic lesions involving <i>Echinococcus multilocularis</i> (肝エキノコックス症の肝切除に対するマス・スクリーニングの役割)
	雑誌名（巻・頁・年）	Journal of Gastroenterology, 32: 351-354, 1997
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文の校閲・全面改定
	内容概要	肝エキノコックス症は早期発見・早期切除で予後の改善が期待される疾患である。スクリーニングで発見される同症の患者は早期発見率が高いために切除可能例が多く、完全切除例は非スクリーニング症例に比較して有意に高かった。
33	著者名（記載順）	Yamashita K, Uchino J, Sato N, Furuya K, Namieno T
	題名（和文題名）	Establishment of a primary culture of <i>echinococcus multilocularis</i> germinal cells for clinical use (肝エキノコックス症の臨床研究利用のための初代 <i>echinococcus multilocularis</i> germinal cells の樹立)
	雑誌名（巻・頁・年）	Journal of Gastroenterology, 32: 344-350, 1997
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文の校閲・全面改定
	内容概要	同症の研究には <i>echinococcus multilocularis</i> germinal cells の分離が必要であるが、これまで樹立されていなかった。25℃の低温と anchorage dependent 法で初代培養に成功し、これは免疫細胞染織・電子顕微鏡および in vivo の可移植性実験で証明された。
34	著者名（記載順）	Koito K, Namieno T, Nagakawa T, Morita K
	題名（和文題名）	Solitary cystic tumor of the pancreas: Differential diagnosis by ultrasonography, computed tomography, and endoscopic ultrasonography (膵嚢胞性疾患：超音波法、CT、内視鏡的超音波法による鑑別診断)
	雑誌名（巻・頁・年）	Gastrointestinal Endoscopy, 45: 268-276, 1997
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文の校閲・全面改定
	内容概要	膵嚢胞性病変が腫瘍性か非腫瘍性かを評価するために、超音波内視鏡 (EUS) 所見と切除標本所見および病理診断との関係を検討した。52 病変の内部構造と EUS 所見の整合性から 6 群にわけると、壁厚型・嚢胞腔内腫瘍突出型・厚隔壁型・多発小嚢胞型に属する病変は全て腫瘍性であったが、薄隔壁型・単純嚢胞型に属する病変は全て非腫瘍性であった。EUS は膵嚢胞性疾患に必須の検査法であり治療法選択に有用である。

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

35	著者名（記載順）	Sato N, Uchino J, Takahashi M, Aoki S, Takahashi H, Yamashita K, Matsushita M, Suzuki K, <u>Namieno T</u>
	題名（和文題名）	Surgery and outcome of alveolar echinococcosis of the liver: Historical mass-screening experiences in Japan (肝エキノコックス症の手術と転帰：日本におけるマス・スクリーニングの歴史的比較)
	雑誌名（巻・頁・年）	International Surgery, 82: 201-204, 1997
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文の校閲・全面改定
	内容概要	ELISA を中心とした最近のスクリーニング法、血清学的検査を中心とした過去のスクリーニング法、非スクリーニングのそれぞれで診断された患者の切除率と転帰を調べると、最近の方法がいずれも優位であった。現在のスクリーニング法は患者にとって福音と考えられる。
36	著者名（記載順）	Yamashita K, Furuya K, <u>Namieno T</u> , Sato N, Shimamura T, Uchino J
	題名（和文題名）	Intraperitoneal dissemination probably caused by needle biopsy of alveolar echinococcosis of the liver: An experimental study (肝エキノコックス症診断のための針生検による腹腔内播種の蓋然性：実験的研究)
	雑誌名（巻・頁・年）	World Journal of Surgery, 21: 856-859, 1997
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文の校閲・全面改定
	内容概要	肝エキノコックス症は寄生虫の感染性疾患であるが、他臓器への転移などその生物学的態様は悪性疾患類似である。同症診断のために肝生検が施行されることが多いが、腹腔内播種や針穿刺路の移植などの危険性が危惧される。この問題を実験的に証明し、針穿刺の危険性を世に問うた。
37	著者名（記載順）	Koito K, <u>Namieno T</u> , Nagakawa T, Morita K
	題名（和文題名）	Inflammatory pancreatic masses: Differentiation from ductal carcinoma with contrast-enhanced sonography using carbon dioxide microbubbles (炎症性膵腫瘍：微小気泡化二酸化炭素を使用した造影エコー法による膵管癌との鑑別)
	雑誌名（巻・頁・年）	American Journal of Roentgenology, 169: 1263-1267, 1997
	分担内容	(日)研究の統括 (月)資料の評価・分析 (火)論文の校閲・全面改定
	内容概要	膵癌（35 例）と腫瘍形成性膵炎（20 例）を鑑別診断するために、microbubble 化した二酸化炭素を動注して腫瘍の造影効果を US、CT、DSA との間で比較した。US は腫瘍形成性膵炎の 91% で isovascularity を、膵癌の 91% で hypovascularity を示し、他の機器より有意に造影効果を反映した (sensitivity 98%, accuracy 95%)。同法で呈示される所見は両者の鑑別診断にきわめて有用であった。
38	著者名（記載順）	<u>Namieno T</u> , Takahashi M, Koito K, Shimamura T, Sato N, Une Y, Yamashita K
	題名（和文題名）	Preoperative prediction of postoperative reserve hepatic function for liver surgery for hepatobiliary, pancreatic cancer (肝・胆・膵癌における肝切除術後の残肝予備能を術前に推定する方法)
	雑誌名（巻・頁・年）	International Journal of Oncology, 11: 151-155, 1997
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文作成

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	内容概要	99mTc-PMT による肝胆道シンチグラフィーで関心領域を測定することによって肝切除後の残肝予備能を術前に推測する方法を開発した。同法は、肝・胆・膵の悪性疾患において肝切除術を施行する際に術前に残肝の予備能が推定され、安全な手術に寄与することが期待される。
39	著者名（記載順）	<u>Namieno T</u> , Koito K, Muraoka S, Sato N
	題名（和文題名）	Carcinoma of the ampulla of Vater with superficial and three-dimensional spread into the duodenum, common bile duct, and pancreatic duct (十二指腸・総胆管・膵管の3次元方向に表層進展したファーター乳頭部癌)
	雑誌名（巻・頁・年）	Digestive Surgery, 14: 319-322, 1997
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	Vater 乳頭部原発の癌が十二指腸・膵管・総胆管に表層進展した稀な症例を経験したので報告した。
40	著者名（記載順）	<u>Namieno T</u> , Koito K, Nagakawa T, Uchino J
	題名（和文題名）	Diagnostic features of images in primary small cell carcinoma of the pancreas (膵原発小細胞癌の画像診断上の特徴)
	雑誌名（巻・頁・年）	American Journal of Gastroenterology, 92: 319-322, 1997
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	膵の小細胞癌はきわめて珍しく、本例も術前はラ氏島腫瘍と誤診して病理診断で初めて小細胞癌と判明した。そこで、既出論文を medline で調べ、膵に小細胞癌が存在しうる可能性を確認し、その病態を調べ、化学療法の有効性を検討し、誤診となった画像所見を再評価して当論文となった。
41	著者名（記載順）	Koito K, <u>Namieno T</u> , Nagakawa T, Morita K
	題名（和文題名）	Delayed enhancement of islet cell carcinoma on dynamic computed tomography: A sign of its malignancy (ダイナミック CT におけるラ氏島腫瘍の晩期濃染：悪性化のサイン)
	雑誌名（巻・頁・年）	Abdominal Imaging, 22: 304-306, 1997
	分担内容	(E)研究の統括 (F)資料の評価・分析 (G)論文の校閲・全面改定
	内容概要	CT にて腫瘍が動脈相から 3、5 分後に強く濃染されるラ氏島細胞癌を経験し、ラ氏島細胞腫における新しい悪性化のサインと考え報告した。晩期相での濃染の原因は膵内静脈の腫瘍塞栓に伴う造影剤の wash out 遅延であった。この後期相の濃染は肝転移やリンパ節転移のないラ氏島細胞腫の悪性化を示唆する所見と考えられた。
42	著者名（記載順）	<u>Namieno T</u> , Koito K, Higashi T, Takahashi M, Yamashita K, Kondo Y
	題名（和文題名）	Assessing the suitability of gastric cancer for limited resection: Endoscopic prediction of Lymphnode metastases (早期胃癌縮小術の適応基準の評価：リンパ節転移の内視鏡的予測)
	雑誌名（巻・頁・年）	World Journal of Surgery, 22: 859-864, 1998
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	内容概要	早期胃癌縮小術の適応基準作成と informed consent に資すことを目的に、1470 例 (m 癌：763 例、sm 癌：707 例) のリンパ節転移を病理学的因子に基づいて詳細に検討した。その結果、粘膜内癌・径 10mm 以下の癌・隆起型癌・分化度の高い癌・潰瘍あるいは潰瘍瘢痕のない癌は縮小術の適応があるが、これ以外の範疇に入る癌は基本的にリンパ節転移陽性の潜在的危険性があることを銘記すべきとした。
43	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Koito K, Higashi T, Shimamura T, Yamashita K, Sato N, Kondo Y
	題名 (和文題名)	Assessing the suitability of gastric carcinoma for limited resection: Histologic differentiation of endoscopic biopsy (早期胃癌縮小術の適応基準の評価：内視鏡的生検の組織学的分化度)
	雑誌名 (巻・頁・年)	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文作成
	分担内容	World Journal of Surgery, 22: 865-868, 1998
	内容概要	早期胃癌縮小術の適応基準作成に問題となる事項に、生検材料の組織型と切除標本の組織型との間に乖離が存在することである。1018 例の生検と永久標本との間の組織型の相関を回帰分析して検討した。sm 癌では有意な乖離が存在した。次いで、生検で示された 344 例の高分化型 m 癌を分析したところ、中分化型管状腺癌は永久標本では約 16%でより分化度の低い癌であった。この組織型の癌は縮小術が不適当な可能性がある。
44	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Koito K, Higashi T, Shimamura T, Yamashita K, Kondo Y
	題名 (和文題名)	Tumor recurrence following resection for early gastric carcinoma and its implications for a policy of limited resection (早期胃癌縮小術の適応基準の評価：早期胃癌切除後の再発)
	雑誌名 (巻・頁・年)	World Journal of Surgery, 22: 869-873, 1998
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文作成
	内容概要	早期胃癌縮小術の適応基準作成に際し、治癒切除後の長期予後を検討しておく必要がある。自験例 1585 名のうち再発したのは 16 名 (1.0% ; m 癌で 0.29%、sm 癌で 1.6%) であった。10 名は術後 5 年以内に再発死亡し、血行性転移が多かった。再発に関与する病理因子の検討から、隆起成分をもつ癌・分化度の高い癌 (pap, tub1) ・リンパ節転移陽性例・脈管侵襲陽性例・sm 癌が再発の危険因子であった。
45	著者名 (記載順)	Koito K, <u>Namieno T</u> , Nagakawa T
	題名 (和文題名)	Diagnosis of arteriovenous malformation of the pancreas by color Doppler ultrasonography (カラードップラー超音波法による膵の動静脈奇形の診断)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Abdominal imaging, 23: 84-86, 1998
	分担内容	(日)資料の評価・分析 (月)論文の校閲・全面改定
	内容概要	膵の動静脈奇形は稀な疾患であるが、進行すると致命的な病態を呈する。これまで同症の診断は侵襲的な方法で診断されていたが、カラードップラー超音波法でモザイク模様・拍動波を描出することによって非侵襲的に診断が可能になった。
46	著者名 (記載順)	Koito K, <u>Namieno T</u> , Morita K

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	題名 (和文題名)	Differential diagnosis of small hepatocellular carcinoma and adenomatous hyperplasia with power Doppler sonography (パワードップラー法による小肝細胞癌と腺腫性過形成の鑑別診断)
	雑誌名 (巻・頁・年)	American Journal of Roentgenology, 170: 157-161, 1998
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文の校閲・全面改定
	内容概要	径 20mm 以下の 53 個の結節性肝病変に対して、原発性肝癌と腺腫様過形成の鑑別診断に power Doppler US を用い、color Doppler US と比較検討した。その結果、sensitivity (81% vs 53%), negative predictive value (78% vs 53%) で、power Doppler US が有意に高い診断能を有していた。また、pulse Doppler 法の併用で肝癌の内部は拍動流を呈するのに対して腺腫様過形成には定常流しか描出されず、両者の鑑別が可能であった。
47	著者名 (記載順)	Koito K, <u>Namiemo T</u> , Ichimura T, Yama N, Hareyama M, Morita K, Nishi M
	題名 (和文題名)	Mucin-producing pancreatic tumors: Comparison of MR cholangiopancreatography with endoscopic retrograde cholangiopancreatography (粘液産生膵腫瘍：MRCP と ERCP の比較)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Radiology 208: 231-237, 1998
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文の校閲・全面改定
	内容概要	粘液産生膵腫瘍の診断における MRCP と ERCP の診断能を 28 例で比較検討した。その結果、MRCP は拡張膵管分枝の描出能が有意に良好であり、嚢胞腺腫・腺癌で主膵管と同時に嚢胞を描出し得たが、嚢胞内中隔や結節描出能には両者間に有意差を認めなかった。MRCP は ERCP に比較して侵襲性がきわめて低く、粘液産生膵腫瘍のフォローアップに有用であり、腫瘍の大きさ・範囲の評価にも重要である。
48	著者名 (記載順)	Takahashi M, Sasaki F, <u>Namiemo T</u> , Matsuhisa T, Okawa Y, Taguchi K, Takahashi H, Uchino J
	題名 (和文題名)	Transverse colonic stenosis (横行結腸の狭窄例)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Pediatric Surgery International, 13: 191-192, 1998
	分担内容	(E)資料の評価・分析 (F)論文の校閲・全面改定
	内容概要	小児の結腸の狭窄は珍しい。症例は下腹部痛を反復し、8 回目の発症時に右上腹部に腫瘤を触れ、注腸バリウム検査で横行結腸の狭窄を認め、切除にて寛解した。
49	著者名 (記載順)	<u>Namiemo T</u> , Koito K, Higashi T, Takahashi M, Shimamura T, Yamashita K, Kondo Y
	題名 (和文題名)	Endoscopic prediction of tumor depth of gastric carcinoma for assessing the indication of its limited resection (胃癌の縮小手術の適応決定のための内視鏡的腫瘍深達度の予測)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Oncology Reports, 7: 57-61, 2000

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文作成
	内容概要	2628 例の胃癌患者を対象に内視鏡的深達度診断能を検討した。その結果、早期癌と進行癌の鑑別診断能は信頼度 86.5%、感度 87.1%、特異度 85.9%との結論を得、充分信頼に耐え得ると考えられた。
50	著者名 (記載順)	Koito K, <u>Namieno T</u> , Ichimura T, Hirokawa N, Syonai T, Hareyama M, Katsuramaki T, Hirata K, Nishi M
	題名 (和文題名)	Power Doppler sonography: Evaluation of treatments for hepatocellular carcinoma by transarterial embolization and/or percutaneous ethanol injection therapy (肝細胞癌に対する経動脈塞栓術および経皮エタノール注入療法後のパワードoppler法による評価)
	雑誌名 (巻・頁・年)	American Journal of Roentgenology, 174: 337-341, 2000
	分担内容	(B)研究の統括 (F)資料の評価・分析 (C)論文の校閲・全面改定
	内容概要	原発性肝癌 (38 例) に対する TAE および PEIT 後の治療効果判定の優劣を power Doppler US、color Doppler US、CT の間で比較検討した。power Doppler US の感度は color Doppler US より有意に優れていたが、CT とは同程度であった。しかし、リピオドールが集積して濃染が不明な結節の判定は CT より優れていた。power Doppler US はベッドサイドで簡便に治療効果判定が可能であるとの結論を得た。
51	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Koito K, Takahashi M, Une Y, Yamashita K, Shimamura T
	題名 (和文題名)	Survival-associated histologic spreading-modes of the operable, intrahepatic and peripheral-type cholangiocarcinomas (切除可能な肝内抹消型胆管癌の生存に関連する組織学的進展様式)
	雑誌名 (巻・頁・年)	World Journal of Surgery (in press)
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文作成
	内容概要	20 例の切除された肝内抹消型胆管癌の組織学的進展様式を検討し、患者の転移・予後と関連した因子を調べた。組織学的進展様式は主に胆管壁浸潤・グリッソン鞘内の多方向浸潤・血管浸潤の 3 様式に分類された。血管浸潤が転移と強く関連し、予後との関係も有意であった。
52	著者名 (記載順)	Koito K, Namieno T, Nagakawa T, Ichimura T, Hirokawa N, Mukaiya M, Hirata K, Hareyama M
	題名 (和文題名)	Congenital arteriovenous malformation of the pancreas: Its diagnostic features on images (膵臓の先天性動静脈奇形：画像上の診断的特徴)
	雑誌名 (巻・頁・年)	Pancreas (accepted)
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文の校閲・全面改定
	内容概要	動静脈奇形の診断法について、超音波・CT・血管造影法を比較検討した。その結果、血管造影は病態の血行力学的特徴を具現したが、カラードoppler法も簡便かつ非侵襲的に病変の血流状態を描出し、血管造影法に比肩した。

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

53	著者名 (記載順)	小池能宣, 秦温信, 佐々木文章, 五十嵐究, <u>波江野力</u> , 益子博幸, 鈴木宏明, Saiful Alam, 内野純一, 金田清志, 富沢一浩
	題名	鎖骨上窩腫瘍を主訴とした小児 Klippel-Feil 症候群の 1 例
	雑誌名 (巻・頁・年)	北海道外科雑誌, 31: 28-30, 1986
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	頸肋を鎖骨上窩腫瘍として触知して、Klippel-Feil 症候群と診断した症例を経験した。本症の軽症例は一般に予後良好であるが、外傷で容易に脊髄損傷を来しやすいことを警鐘した。
54	著者名 (記載順)	<u>波江野力</u> 、武市紀年、伝法公麿、森道夫、内野純一、佐々木本道、小林博
	題名 (和文題名)	肝炎自然発生 LEC (Long Evans Cinnamon) ラットの樹立
	雑誌名 (巻・頁・年)	日本外科学会雑誌, 90: 573-57, 1989
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文作成
	内容概要	LE ラットの突然変異種として継代されていた LEC ラットと LEA ラットのうち、24 世代以降の LEC ラットのみが生後 4-5 ヶ月で突然黄疸を発症した。ヒト激症肝炎類似の臨床経過と病理組織像を呈することが判明し、肝炎自然発症動物モデルとして広く認知された。
55	著者名 (記載順)	<u>波江野力</u> 、武市紀年、伝法公麿、森道夫、内野純一、佐々木本道、小林博
	題名 (和文題名)	肝炎自然発生 LEC (Long Evans Cinnamon) ラットにおける肝炎発生原因の検索
	雑誌名 (巻・頁・年)	日本外科学会雑誌, 90: 705-711, 1989
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文作成
	内容概要	LEC ラットの肝炎発生原因を検索して、肝炎ウイルスの関与は否定的であり、常染色体劣性遺伝様式に規定された遺伝的背景を有していることが判明した。
56	著者名 (記載順)	<u>波江野力</u> 、武市紀年、伝法公麿、森道夫、内野純一、佐々木本道、小林博
	題名 (和文題名)	肝炎自然発生 LEC (Long Evans Cinnamon) ラットにおける複合免疫不全の合併
	雑誌名 (巻・頁・年)	日本外科学会雑誌, 90: 886-893, 1989
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文作成
	内容概要	肝炎自然発症 LEC ラットは、特異的免疫能である T cell および B cell の複合免疫不全と、それを代償するかのように非特異的細胞性免疫能 (特に、マクロファージ) の亢進が認められた。
57	著者名 (記載順)	<u>波江野力</u> 、武市紀年、小中重夫、伝法公麿、森道夫、内野純一、佐々木本道、小林博
	題名 (和文題名)	肝炎自然発生 Long Evans Cinnamon (LEC) ラットの長期生存例における慢性肝炎から肝癌への進展
	雑誌名 (巻・頁・年)	肝臓, 30: 622-631, 1989
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文作成
	内容概要	肝炎自然発症 LEC ラットの長期生存例が、慢性肝障害 (慢性肝炎) から肝癌の自然発症に至る過程を諸化学的検査および病理組織学的に確認した。
58	著者名 (記載順)	河田聡、細川真澄男、宇根良衛、 <u>波江野力</u> 、沢村豊、秦温信、内野純一、小林博

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	題名 (和文題名)	培養ヒト肝細胞癌浸潤リンパ球と抗腫瘍活性の検討
	雑誌名 (巻・頁・年)	医学のあゆみ, 148: 271-272, 1989
	分担内容	
	内容概要	肝細胞癌患者から腫瘍浸潤リンパ球 (TIL) の培養を試み、全例で TIL の増殖に成功した。フェノタイプ解析では培養 2~4 週目の TIL は、CD3 陽性・HLA-DR 陽性の活性化 T 細胞が主体であった。この TIL は in vitro 実験で標的癌細胞に対して高い抗腫瘍活性を有していた。
59	著者名 (記載順)	河田聡、細川真澄男、宇根良衛、 <u>波江野力</u> 、沢村豊、秦温信、内野純一、小林博
	題名 (和文題名)	ヒト肝細胞癌浸潤リンパ球 (TIL) の培養と抗腫瘍活性の検討
	雑誌名 (巻・頁・年)	BIO THERAPY, 3: 75-79, 1989
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文の校閲・全面改定
	内容概要	肝細胞癌患者から分離・培養・増殖した TIL をアイソトープ標識して患者に静脈内投与 (十分な informed consent を得た上で) してその体内分布を検索した。腫瘍局所への集積は不十分であったが、細胞数の増加・細胞活性の改善を企図することによって臨床応用への期待が持てた。
60	著者名 (記載順)	河田聡、細川真澄男、宇根良衛、佐藤直樹、中島保明、 <u>波江野力</u> 、内野純一、小林博
	題名 (和文題名)	原発性肝細胞癌に対する自己脾細胞を用いた免疫化学療法
	雑誌名 (巻・頁・年)	BIO THERAPY, 5: 1258-1261, 1989
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文の校閲・全面改定
	内容概要	肝細胞癌患者の摘出脾細胞を IL-2 下に培養して LAK 細胞を誘導し、患者に対して養子移入を試みた。切除不能 3 例中 2 例で腫瘍径の縮小や腫瘍マーカーである AFP 値の低下をみ、脾由来 LAK 細胞の養子免疫療法の有効性が示唆された。
61	著者名 (記載順)	<u>波江野力</u> 、内野純一、秦温信、宇根良衛、武市紀年、小林博
	題名 (和文題名)	ラット肝部分切除後の肝再生過程に認められる肝癌の増殖促進
	雑誌名 (巻・頁・年)	肝臓, 30 : 103-104, 1989
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文作成
	内容概要	担癌ラットの肝部分切除後の肝癌増殖促進が実際の腫瘍細胞の細胞回転から実証的に証明した。肝部分切除後、経時的に腫瘍切片を鏡検すると 36 時間目で細胞分裂が最高値であった。
62	著者名 (記載順)	<u>波江野力</u> 、内野純一、武市紀年、秦温信、河田聡、李宇、小松本正志、小林博
	題名 (和文題名)	ラット肝部分切除後の肝再生と肝癌増殖促進 - その実験的機序解析 -
	雑誌名 (巻・頁・年)	医学の歩み, 149: 949-950, 1989
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文作成
	内容概要	担癌ラットの肝部分切除後の肝癌増殖促進効果の機序解析を試みた。その結果、肝部分切除後に誘導される肝再生因子が肝癌の増殖に関係することを in vitro の実験で示唆した。
63	著者名 (記載順)	<u>波江野力</u> 、武市紀年、秦温信、小林博、内野純一
	題名 (和文題名)	ラット肝部分切除後の肝癌増殖促進効果に関する機序解析 - ヒト肝癌術後の早期再発に関する実験的機序解析 -

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	雑誌名 (巻・頁・年)	肝臓, 30: 889-897, 1989
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文作成
	内容概要	担癌ラットの肝部分切除後の肝癌増殖促進効果の機序は、宿主の術後免疫能の変動や術後誘導される可能性のあるエストロゲンには関係せず、分子量 10 万強の液性因子が関与していることを bioassay で証明した。
64	著者名 (記載順)	秦温信、五十嵐究、 <u>波江野力</u> 、高田尚幸、佐々木文章、宇根良衛、内野純一、梶原昌治
	題名 (和文題名)	培養システムを応用した肝癌新治療法の開発 - とくにヒト上皮成長因子による抗癌剤の作用増強効果 -
	雑誌名 (巻・頁・年)	癌と化学療法, 16: 1874-1879, 1989
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)論文の校閲・全面改定
	内容概要	ヒト上皮成長因子(hEGF)の抗癌剤作用の増強効果をヒト肝癌細胞株を用いて検討した。hEGF は培養肝癌細胞に対して増殖促進性に作用し、癌細胞表面の EGF レセプターの存在が免疫組織学的に証明された。
65	著者名 (記載順)	後藤田明彦、 <u>波江野力</u> 、小井戸一光、高橋雅俊、高橋典彦、増子佳弘、大江成博、東常視、宮内甫、長谷川紀光、宮川宏之、須賀俊博、村島義男、佐藤利宏
	題名 (和文題名)	胆管癌との鑑別が困難であった Mirizzi 症候群の 1 例
	雑誌名 (巻・頁・年)	腹部画像診断, 11: 1023-1027, 1991
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)論文の校閲・全面改定
	内容概要	胆嚢結石ガ総胆管に穿破して総胆管狭窄を呈し、その不整な狭窄像から胆管癌との鑑別が困難であった症例を経験したので貴重な教育的意義として報告した。
66	著者名 (記載順)	高橋典彦、高橋雅俊、小井戸一光、宮内甫、長谷川紀光、東常視、 <u>波江野力</u> 、大江成博、後藤田明彦、増子佳弘、村島義男、須賀俊博、宮川宏之、夏井清人、佐藤利宏
	題名 (和文題名)	胆管癌との鑑別が困難であった良性胆管狭窄の 1 例
	雑誌名 (巻・頁・年)	腹部画像診断, 12: 521-526, 1992
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)論文の校閲・全面改定
	内容概要	各種画像診断で上部胆管の狭窄・辺縁の硬化・不整像から胆管癌が否定し得ず手術施行したが、結果的に良性病変であった症例を教育的意義として報告した。
67	著者名 (記載順)	高橋典彦、東常視、宮内甫、長谷川紀光、高橋雅俊、 <u>波江野力</u> 、片岡昭彦、山下晃史、後藤田明彦、村島義男
	題名 (和文題名)	大腸癌の初発症状と術後成績
	雑誌名 (巻・頁・年)	北海道農村医学会雑誌, 24: 108-109, 1992
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文の校閲・全面改定
	内容概要	大腸癌の初発症状と臨床病理学的因子および予後との関連を調べた。症状は血便・腹痛・便秘異常・貧血・無症状・検診・腫瘍触知・イレウス等であり、病変存在部位と関連をもっていた。また、右側結腸癌では腫瘍径・貧血・深達度が進行していた。無症状・検診発見・血便群の予後が比較的良好であった。
68	著者名 (記載順)	中村隆志、東常視、高橋雅俊、 <u>波江野力</u> 、片岡昭彦、山下晃史、小川秀彰、近藤征文

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	題名 (和文題名)	ヒト乳がんにおける epidermal growth factor receptor と C-erbB-2 product 発現
	雑誌名 (巻・頁・年)	北海道農村医学会雑誌, 26 : 76-77, 1993
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	EGFR とがん遺伝子産物である erbB-2 の乳癌における発現を観察し、臨床パラメーターとの関連を調べた。erbB-2 は正常乳腺には存在せず、これが陽性の乳癌は予後不良であり、予後推測の指標になり得ると考えられた。
69	著者名 (記載順)	増子佳弘、 <u>波江野力</u> 、高野典彦、後藤田明彦、大江成博、高橋雅俊、東常視、長谷川紀光、宮内甫、内野純
	題名 (和文題名)	胆嚢摘出術後に発症した急性肺血栓塞栓の 1 例
	雑誌名 (巻・頁・年)	日本消化器外科学会雑誌, 26: 136-140, 1993
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文の校閲・全面改定
	内容概要	消化器外科領域でも平易な手術とされている胆嚢摘出術の術後合併症として、生命に関わる重篤な肺血栓症を経験したので、警鐘を鳴らすとともにその診断・治療法について詳述した。
70	著者名 (記載順)	後藤学、小井戸一光、長川達哉、村島義男、須賀俊博、八百坂透、今村哲理、藤永明、宮川宏之、東野清、栃原正博、佐藤隆啓、夏井清人、佐藤晋介、安保智典、山口聖隆、加藤茂治、高橋雅俊、 <u>波江野力</u> 、近藤征文、村岡俊二、佐藤利宏
	題名 (和文題名)	下部胆管 adenomyomatous hyperplasia の 1 例
	雑誌名 (巻・頁・年)	腹部画像診断, 11: 1034-1041, 1993
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	ERCP 像で立ち上がり急峻な隆起性病変、EUS 像で同部位に辺縁整で隣実質と同程度の輝度を持つ内部均一な球状腫瘤が描出されたこれらの所見は通常見られる胆管癌の所見とは異なり、切除所見との対比で adenomyomatous hyperplasia の特徴的な所見と考えられた。
71	著者名 (記載順)	長川達哉、小井戸一光、佐藤隆啓、村島義男、須賀俊博、八百坂透、今村哲理、藤永明、宮川宏之、栃原正博、東野清、夏井清人、安保智典、曾田光彦、石崎彰、加藤茂治、麻生和信、高橋雅俊、 <u>波江野力</u> 、近藤征文、村岡俊二、佐藤利宏
	題名 (和文題名)	混合型肝細胞癌の 1 例 - 特異な画像所見と病理学的検討を中心に -
	雑誌名 (巻・頁・年)	腹部画像診断, 14: 677-684, 1994
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	造影エコー法で腫瘍内部から辺縁に及ぶ動脈性血流が、また、CTAP で門脈性血流を認める混合型肝細胞癌を経験し、これらの所見は病理組織学的に確認された。
72	著者名 (記載順)	小井戸一光、宮川宏之、長川達哉、村島義男、須賀俊博、八百坂透、今村哲理、藤永明、栃原正博、東野清、佐藤隆啓、夏井清人、安保智典、高橋雅俊、 <u>波江野力</u> 、近藤征文、村岡俊二、佐藤利宏
	題名 (和文題名)	早期胆管癌の 1 例：画像診断の適応と限界
	雑誌名 (巻・頁・年)	胃と腸, 29: 832-836, 1994
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)文献検索

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	内容概要	深達度 fm の早期中下部胆管癌は稀少であり、診断は困難である。切除例の組織型は乳頭状腺癌であり、術前深達度 fm は超音波内視鏡でも診断不可であり、今後の課題として提起した。
73	著者名 (記載順)	山口聖隆、小井戸一光、長川達哉、村島義男、須賀俊博、八百坂透、今村哲理、藤永明、宮川宏之、東野清、栃原正博、佐藤隆啓、夏井清人、安保智典、佐藤晋介、加藤茂治、後藤学、高橋雅俊、 <u>波江野力</u> 、近藤征文、村岡俊二、佐藤利宏
	題名 (和文題名)	B 型慢性肝炎に発生した微小肝細胞癌の 1 例
	雑誌名 (巻・頁・年)	腹部画像診断, 14: 901-905, 1994
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	最大径 2cm 以下の微小肝細胞癌は多数発見されてきたが、最大径 1cm 以下の微小肝細胞癌の発見は困難とされている。術前の超音波検査にて発見された微小肝細胞癌について経験したので問題点を含めて報告した。
74	著者名 (記載順)	片岡昭彦、近藤征文、高橋雅俊、東常視、 <u>波江野力</u> 、中村隆志、山下晃文、小川秀彰
	題名 (和文題名)	胆道排泄シンチグラムによる胆道再建例の肝予備能の可能性について
	雑誌名 (巻・頁・年)	胆膵の生理機能, 10: 52-55, 1994
	分担内容	(B)研究の統括 (F)資料の評価・分析 (C)論文の校閲・全面改定
	内容概要	胆道排泄シンチグラムによる肝予備能評価は有用であると報告してきた。同法が胆道再建例についても有用であるか検討したが、限定的であるとの結果を得た。
75	著者名 (記載順)	増子佳弘、 <u>波江野力</u> 、東常視、高橋典彦、後藤田明彦、大江成博、高橋雅俊、長谷川紀光、内野純一
	題名 (和文題名)	結腸癌の術後累積 5 年生存率に關与する臨床病理学的因子
	雑誌名 (巻・頁・年)	日本臨床外科医学会雑誌, 55: 2764-2769, 1994
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (C)論文の校閲・全面改定
	内容概要	結腸癌の予後推測因子を解析した。癌の浸潤様式・癌局在部位の相違が深く関係していることが判明し、診断と癌細胞の生物学的行動に關して解決すべき問題を提起した。
76	著者名 (記載順)	西田靖仙、中村隆志、東常視、高橋雅俊、 <u>波江野力</u> 、片岡昭彦、小川秀彰、小林功、横山良司、近藤征文
	題名 (和文題名)	検診を契機に発見された甲状腺癌の検討
	雑誌名 (巻・頁・年)	北海道農村医学会雑誌, 27: 42-43, 1994
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	早期発見された甲状腺腫瘍を解析して、従来の検査法の限界を指摘した。現実的には、注意深い視触診と超音波検査・サイログロブリン測定が有用と結論した。
77	著者名 (記載順)	羽田力、宇根良衛、神山俊哉、嶋村剛、中西一彰、桜井経徳、 <u>波江野力</u> 、松岡伸一、松下通明、佐藤直樹、中島保明、内野純一
	題名 (和文題名)	Lip-TAE 後発生し、門脈閉塞を来した Biloma の 2 例
	雑誌名 (巻・頁・年)	癌と化学療法, 22: 1665-1668, 1995
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (C)論文の校閲・全面改定
	内容概要	Lip-TAE は肝悪性腫瘍の治療法の一つとしてその有効性が認められている。その合併症として稀な門脈閉塞を伴った Biloma を経験したので文献的考察を加えた報告した。

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

78	著者名 (記載順)	津田一郎、伊藤毅、宇根良衛、 <u>波江野力</u> 、小池雅彦、生田圭司、内野純一
	題名 (和文題名)	Biloma へのドレナージ挿入後胆道出血にて二次的な肝切除を要した肝外傷の 1 例
	雑誌名 (巻・頁・年)	日本臨床外科学会雑誌, 57: 1425-1428, 1996
	分担内容	
	内容概要	鈍的肝外傷後の胆道出血と遷延する発熱は biloma の感染を強く示唆し、予後不良の徴候と考えるべきであり、増大傾向を見逃さず肝切除術に移行すべきことを報告した。
79	著者名 (記載順)	<u>波江野力</u> 、小井戸一光、高橋雅俊、西田靖仙、東常視、片岡昭彦、中村隆志、小川秀彰、小林功、横山良司、近藤征文、安保知典
	題名 (和文題名)	急性出血性胃潰瘍に対する 3 剤併用療法 (famotidine, omeprazole and ecabet sodium) の著効例
	雑誌名 (巻・頁・年)	臨床と治療, 27: 103-107, 1999
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (H)資料の評価・分析 (N)論文作成
	内容概要	急性出血性胃潰瘍は出血の程度によっては手術の積極的適応になるが、当該患者の手術拒否によって保存的治療を施行し、3 剤併用が有効であった症例を経験したので報告した。

(3) 総説

1	著者名 (記載順)	<u>波江野力</u> 、武市紀年、小林博
	題名	肝炎・肝癌自然発生モデル-LEC ラット-
	雑誌名 (巻・頁・年)	免疫薬理, 5: 137-139, 1987
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (H)資料の評価・分析 (N)論文作成
	内容概要	非近交系 LE ラットから毛色の違いによって分離された 2 系のラット LEC (Long Evans Cinnamon rat) と (Long Evans Agouti rat) を各系ごとに弟妹交配で継代したところ 24 世代の LEC ラットは、生後 4-5 ヶ月でその 90% で急性肝炎を自然発症した。その主徴は突然発症する黄疸と体重減少であった。
2	著者名 (記載順)	<u>波江野力</u> 、武市紀年、小林博
	題名	肝炎・肝癌自然発生 LEC ラットにおける複合免疫不全の病因論的探索
	雑誌名 (巻・頁・年)	病態生理, 6: 385-386, 1987
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (H)資料の評価・分析 (N)論文作成
	内容概要	LEC ラット肝炎発症に、特異的免疫能と非特異的細胞性免疫能を共に競合した複免疫不全ガ病勢の進行に関与している可能性を対象の LEA ラットを用いて比較検討した。
3	著者名 (記載順)	<u>波江野力</u> 、武市紀年、内野純一、小林博
	題名	肝炎・肝癌自然発生モデル (LEC ラット)
	雑誌名 (巻・頁・年)	臨床科学, 24: 741-748, 1988
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (H)資料の評価・分析 (N)論文作成
	内容概要	肝炎の自然発症、長期生存例の肝癌の自然発症の経過を、生化学所見および組織所見を提示しつつ臨床像と病理組織像を比較対象して論述した。
4	著者名 (記載順)	<u>波江野力</u> 、武市紀年、内野純一、小林博
	題名	肝腫瘍：肝胆疾患 - 新しい診断・治療体系-39. 肝疾患の実験モデル

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	雑誌名 (巻・頁・年)	日本臨床, 46 (増刊号): 1196-1204, 1988
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文作成
	内容概要	肝癌研究の小史を概観して、使用する実験動物の選択と化学発ガン物質およびその投与法を述べ、肝癌の自然発症モデルである LEC ラットの優位性と更に化学発癌物質に対する感受性の高さを述べて、発癌研究に供する有用性を報告した。
5	著者名 (記載順)	波江野力、武市紀年、内野純一、小林博
	題名 (和文題名)	LEC ラット - 肝炎・肝癌自然発症モデル動物-
	雑誌名 (巻・頁・年)	Oncologia, 23: 57-67, 1990
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文作成
	内容概要	肝炎・肝癌自然発症モデル動物である LEC ラットの発症原因を概観し、臨床像・組織像を網羅的に論述した。
6	著者名 (記載順)	内野純一、近藤征文、波江野力
	題名 (和文題名)	胃・十二指腸外科治療の進歩・変遷
	雑誌名 (巻・頁・年)	北海道外科雑誌, 37 : 13-18, 1992
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文作成
	内容概要	北海道在住の外科医師を対象にして、胃・十二指腸の原因とそれに基づく外科的治療の変遷を考究した。潰瘍手術の絶対数の減少は明白であるが出血・穿孔・狭窄を原因とする絶対的手術適応数はむしろ不変であることを示した。また、胃癌手術の縮小手術の系譜を論述した。
7	著者名 (記載順)	小井戸一光、波江野力、長川達哉、村島義男、須賀俊博、高橋雅俊、近藤征文、岡田太、細川真澄男
	題名 (和文題名)	レーザーサーミアによる胆管癌の基礎的、臨床的検討
	雑誌名 (巻・頁・年)	胆と膵, 15: 1061-1067, 1994
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文の校閲・全面改定
	内容概要	CA 19-9 産生胆管細胞癌を用いた in vitro , in vivo の実験的検討から Nd-YAG レーザーを用いたレーザーサーミア温熱療法は抗腫瘍効果を有することが明らかとなった。これらの検討から胆管癌を有する患者に同法を施行した。施行後の切除標本を顕微鏡的に調べたところ、癌の遺残は存在せずびらんや線維化を認めるのみであった。
8	著者名 (記載順)	波江野力、東常視、近藤征文、村島義男
	題名 (和文題名)	早期胃癌の内視鏡的-外科的治療法の接点：外科切除標本の組織学的検索と長期予後に基づいて
	雑誌名 (巻・頁・年)	Gastroenterological Endoscopy (日本消化器内視鏡学会誌), 37 : 1266-1268, 1995
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文作成
	内容概要	早期胃癌の治療法は日々変遷しており、外科的治療法の選択のみならず内視鏡的治療法が開拓されてきた。その適応を根治的縮小術として、腫瘍の内視鏡的形態診断の精度・潰瘍の有無別早期癌の正診率・生検組織型と切除標本組織型の乖離とリンパ節転移の有無の詳細な比較検討が必要であることを論述した。
9	著者名 (記載順)	小井戸一光、長川達哉、波江野力、森田和夫
	題名 (和文題名)	腔内超音波検査法による胆管癌の進展度診断
	雑誌名 (巻・頁・年)	胆と膵, 18 : 131-138, 1997

研 究 業 績 一 覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	分担内容	(H)資料の評価・分析 (用)文献検索
	内容概要	腔内超音波検査法による胆管癌の進展度診断を他の検査法と比較検討した。腔内超音波検査法は、胆管癌の垂直方向深達度診断・肝動脈浸潤診断・門脈浸潤診断に優れていた。しかし、腫瘍が増大すると音波の減衰を来し診断は困難となり、また、胆管水平方向進展度診断は困難であった。
10	著者名 (記載順)	小井戸一光、 <u>波江野力</u> 、長川達哉
	題名 (和文題名)	病態と診断：膵胆管合流異常 (特集 胆膵疾患診療の進歩)
	雑誌名 (巻・頁・年)	内科, 79 : 451-454, 1997
	分担内容	(H)資料の評価・分析 (用)文献検索
	内容概要	膵胆管合流異常の定義・頻度を含めて臨床的意義を解説し、その診断法について画像を呈示して概説した。
11	著者名 (記載順)	小井戸一光、長川達哉、 <u>波江野力</u>
	題名 (和文題名)	黄疸の臨床：診断と治療の進歩. III. 閉塞性黄疸：診断へのアプローチ 1. 閉塞性黄疸診断機器の進歩 2) 腔内超音波検査法
	雑誌名 (巻・頁・年)	日本内科学会雑誌, 86 : 588-596, 1997
	分担内容	(H)資料の評価・分析 (用)文献検索
	内容概要	閉塞性黄疸時における腔内超音波検査法の定義・臨床的有用性・施行の実際について述べ、胆管壁の層構造・胆管癌の垂直方向深達度診断および周囲臓器浸潤診断／水平方向浸潤診断・総胆管結石の診断の各論について論述した。
12	著者名 (記載順)	小井戸一光、 <u>波江野力</u> 、佐藤隆啓、長川達哉、森田和夫
	題名 (和文題名)	内視鏡的超音波：カラードップラー法 (ECDUS)
	雑誌名 (巻・頁・年)	消化器内視鏡, 9 : 667-674, 1997
	分担内容	(H)資料の評価・分析 (用)論文の校閲・全面改定
	内容概要	消化器疾患における内視鏡的超音波カラードップラー法 (ECDUS) の有用性とその施行の実際を具体例と画像を呈示して解説した。ECDUS は消化器疾患に血流診断という新しい概念を導入した。
13	著者名 (記載順)	小井戸一光、 <u>波江野力</u> 、佐藤隆啓、長川達哉、山直也、市村健、庄内孝春、広川直樹、武田美貴、森田和夫
	題名 (和文題名)	胃静脈瘤に対するアプローチ - B-RTO -
	雑誌名 (巻・頁・年)	臨床放射線, 42 : 697-704, 1997
	分担内容	(H)資料の評価・分析 (用)論文の校閲・全面改定
	内容概要	胃静脈瘤に対する逆行性バルーン閉塞下硬化療法は、1-2 回の施行で静脈瘤を完全に硬化可能である。同法は反復して施行可能であり肝機能に与える影響も少なく、患者にとって福音である。
14	著者名 (記載順)	小井戸一光、平野透、 <u>波江野力</u> 、市村健、山直也、晴山雅人、森田和夫、向谷充宏、及川郁雄、平田公一
	題名 (和文題名)	CT-Endoscopy による胆管内腔の 3 次元表示
	雑誌名 (巻・頁・年)	胆と膵, 19 : 223-230, 1998
	分担内容	(H)資料の評価・分析 (用)文献検索

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	内容概要	CT を用いた仮想内視鏡によって胆管内腔の描出を試行した。胆管の閉塞・狭窄部位は 100%描出可能であったが、腫瘍の描出は 65%にとどまった。その理由は微細病変の描出が低値であったことによる。しかし、仮想内視鏡は非侵襲的に胆管内腔の観察が可能であり、今後、各種治療後のフォローアップや検査のシミュレーション等に有用な検査法となるであろうことを論じた。
15	著者名 (記載順)	小井戸一光、市村健、廣川直樹、 <u>波江野力</u>
	題名 (和文題名)	日常診療における超音波診断の役割：胆・膵
	雑誌名 (巻・頁・年)	Radiology Frontier, 2 : 99-103, 1999
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)論文の校閲・全面改定
	内容概要	日常診療における胆膵疾患診断に超音波検査が果たす役割と有用性、および、検査施行時の留意点を解説した。
16	著者名 (記載順)	小井戸一光、市村健、廣川直樹、庄内孝春、晴山雅人、 <u>波江野力</u>
	題名 (和文題名)	超音波と IVR : 1.超音波ガイド下穿刺：その基本からコツまで
	雑誌名 (巻・頁・年)	IVR 会誌, 14 : 289-294, 1999
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	IVR (Interventional Radiology) における超音波ガイド下穿刺の実際と留意点および有用性について具体例を上げて述べた。
17	著者名 (記載順)	小井戸一光、市村健、廣川直樹、庄内孝春、坂田耕一、晴山雅人、 <u>波江野力</u>
	題名 (和文題名)	特集 超音波最前線：超音波カラードプラー法
	雑誌名 (巻・頁・年)	画像診断, 19 : 1274-1282, 1999
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)論文の校閲・全面改定
	内容概要	Full digital machine の導入によって超音波カラードプラー法もより信頼性の高い検査法となった。同法は肝癌や門脈圧亢進症の血流動態解析に有用であり、同法で確定診断に至る例もある。肝胆膵疾患における超音波カラードプラー法の進歩について解説した。

(4) 書籍

1	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Takeichi N, Sasaki M, Dempo K, Mori M, Uchino J, Kobayashi H
	題名 (和文題名)	Clinical and pathological characteristics of LEC rats with spontaneous hepatitis (肝炎自然発症 LEC ラットの臨床病理学的特徴)
	編者・書籍名・発行所 (頁・年)	In: Mori M, et al (eds) . The LEC Rat: A new model for hepatitis and liver cancer; Tokyo: Springer-Verlag, 41-53, 1991
	分担内容	(B)研究の統括 (F)研究計画の作成 (C)資料の評価・分析 (D)論文作成
	内容概要	非近交系の LE ラットから毛色の違う LEC ラットが分離され、弟妹交配で継代したところ 24 世代になって初めて生後約 4 ヶ月頃に 80-90%に急性肝炎を自然発症した。その主徴は突然発現する黄疸であり、そのうち約 80%はヒト劇症肝炎類似の臨床経過および病理組織像を呈して 2 週以内に死亡した。組織学的には spotty necrosis、巨大異型核をもつ肝細胞、肝小葉の中心性壊死や垂広汎性凝固壊死を示した。
2	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Takeichi N, Sasaki M, Dempo K, Mori M, Uchino J, Kobayashi H

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	題名 (和文題名)	Investigation of infectious agents causing spontaneous hepatitis in LEC rats (LEC ラットの肝炎発症原因としての感染性因子の研究)
	編者・書籍名・発行所 (頁・年)	In: Mori M, et al (eds) . The LEC Rat: A new model for hepatitis and liver cancer Tokyo: Springer-Verlag, 70-80, 1991
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文作成
	内容概要	LEC ラットの肝炎発症原因を検索する目的で肝炎ウイルスの関与の有無、遺伝的背景の有無、IgG レベルと肝炎発生との関係について調べた。その結果、LEC ラットの肝炎発生には肝炎ウイルスの関与は否定的であり、常染色体劣性遺伝様式に規定された遺伝的背景を有し、この遺伝的背景と関連していると推察される IgG レベルの低値が肝炎発生と何らかの関係の有しているものと考えられた。
3	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Takeichi N, Sasaki M, Dempo K, Mori M, Uchino J, Kobayashi H
	題名 (和文題名)	Combined immunodeficiency in LEC rats with spontaneous hepatitis (肝炎自然発症 LEC ラットにおける複合免疫不全)
	編者・書籍名・発行所 (頁・年)	In: Mori M, et al (eds) . The LEC Rat: A new model for hepatitis and liver cancer Tokyo: Springer-Verlag, 196-208, 1991
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文作成
	内容概要	急性肝炎および劇症肝炎を自然発症する LEC ラットの発症原因検索として、LEC ラットと同時に分離樹立された近交系の Long Evans Agouti (LEA) ラットを対照として免疫病理学的に調べた。その結果、LEC ラットは特異的免疫能である T cell および B cell の複合免疫不全と、それを代償するような非特異的免疫能 (特に、Mφ) の亢進が認められた。これらの免疫学的異常が LEC ラットの肝炎発症に関与している可能性が推測された。
4	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Takeichi N, Sasaki M, Dempo K, Mori M, Uchino J, Kobayashi H
	題名 (和文題名)	Progress from chronic hepatitis to liver cancer in long-surviving LEC rats (長期生存 LEC ラットにおける慢性肝炎から肝臓への進展)
	編者・書籍名・発行所 (頁・年)	In: Mori M, et al (eds) . The LEC Rat: A new model for hepatitis and liver cancer; Tokyo: Springer-Verlag, 282-297, 1991
	分担内容	(日)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文作成
	内容概要	LEC ラットの長期生存例を観察していくと、慢性的な貧血、腎機能の異常とともに生化学的に慢性肝障害が認められた。肝の組織所見は斑状肝細胞壊死像と再生小型肝細胞をみる慢性肝炎像であった。しかも、生後 18 ヶ月齢以降のラットは全例で肝細胞癌を合併した。また、LEC ラットの肝発癌過程を追跡すると、化学発癌過程と同様な oval cell, hyperplastic foci, hyperplastic nodule が認められた。
5	著者名 (記載順)	<u>Namieno T</u> , Higashi T, Kondo Y, Takahashi M, Gotoda A, Kataoka A, Yamashita A, Takahashi N, Koito K, Imamura A, Suga T, Murashima Y, Uchino J
	題名 (和文題名)	Recurrence of early gastric cancer. (早期胃癌の再発)

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	編者・書籍名・発行所(頁・年)	In: Takahashi T (ed) . Recent Advances in Management of Digestive Cancers; Tokyo: Springer-Verlag, 348-350, 1993
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	根治的治癒切除を受けた1585名の早期胃癌患者の再発因子を調べた。うち、16名が再発死亡したが、14例は分化度の高い癌であり、2例が分化度の低い癌であった。また、14例が粘膜下層癌であり、2例が粘膜癌であった。肉眼形態では12例で隆起成分を有しており、特に、隆起成分と陥凹成分を混合する癌では、リンパ節転移頻度・微小浸潤の程度が有意に高かった。
6	著者名(記載順)	<u>Namieno T</u> , Koito K, Okada F, Hosokawa M, Murashima Y, Kondo Y, Uchino J
	題名(和文題名)	Anticancer effect of balloon laserthermia (バルーンレーザー温熱療法の抗腫瘍効果)
	編者・書籍名・発行所(頁・年)	In: Rao RS, et al (eds) . Proceedings of the International Cancer Congress. Bologna: Monduzzi Editore, 1999-2001, 1994
	分担内容	(E)研究の統括 (F)研究計画の作成 (G)資料の評価・分析 (H)論文作成
	内容概要	CA 19-9 産生胆管細胞癌を用いた in vivo, in vitro の基礎的検討から Nd:YAG レーザーを用いたレーザー温熱療法は、抗腫瘍効果を有することが明らかとなった。この結果を得て、胆管癌を有する患者にレーザー温熱療法を施行した。施行後の切除材料の病理組織学的検討では施行部位の糜爛や線維化を認めたが、癌の遺残は存在せず、同法は胆管癌の就学的治療法の一つになり得るとの結論を得た。
7	著者名(記載順)	Koito K, Goto M, Nagakawa T, Sato T, Murashima Y, <u>Namieno T</u>
	題名(和文題名)	A combination therapy with transarterial embolization and percutaneous ethanol injection therapy for primary hepatocellular carcinoma (原発性肝細胞癌に対する経動脈的塞栓術と経皮エタノール注入療法の組み合わせ治療)
	編者・書籍名・発行所(頁・年)	In: Rao RS, et al (eds) . Proceedings of the International Cancer Congress. Bologna: Monduzzi Editore, 2025-2027, 1994
	分担内容	(E)資料の評価・分析 (F)論文の校閲・全面改定
	内容概要	33例の原発性肝細胞癌患者 TAE および PEIT を施行し、これらの群と TAE 単独群との間で予後比較検討した。1年および2年の生存率は組み合わせ治療群の方が有意に良好であった。
8	著者名(記載順)	Ogawa H, Kondo Y, <u>Namieno T</u> , Higashi T, Takahashi M, Kataoka A, Nakamura T, Nishida Y, Kobayashi I, Yokoyama R
	題名(和文題名)	Total gastrectomy with para-aortic lymphnode dissection: Downward approach following the esophageal amputation (大動脈周囲リンパ節郭清を伴う胃全摘術：食道離断に続く下方アプローチ)
	編者・書籍名・発行所(頁・年)	In: Nishi M, et al (eds) . 1st International Gastric Cancer Congress; Bologna: Monduzzi Editore, 1261-1265, 1995

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	分担内容	(回)研究の統括 (月)資料の評価・分析 (火)論文の校閲・全面改定
	内容概要	進行胃癌患者の新しい術式を報告し、大血管周囲リンパ節転移患者の術後5年生存率について調べた。術式は通常の方法とは逆に食道離断から開始して、大血管周囲のリンパ節を十分に郭清する方法であり、輸血例および術後合併症の発生頻度が抑えられ、5年生存率は約20%であった。本法は円滑な手術が施行され、予後の改善に寄与した。
9	著者名(記載順)	<u>Namieno T</u> , Koito K, Sato N, Uchino J
	題名(和文題名)	Reciprocal effect of sinusoidal endothelial and Kupffer cells on primary hepatocytes treated with Cyclosporin A (CYA) or FK 506 (肝類洞内皮細胞およびクッパー細胞が免疫抑制剤サイクロスポリン A (CYA) あるいは FK506 で処理された初代培養肝細胞に与える相反する効果)
	編者・書籍名・発行所(頁・年)	In: Abe O, et al (eds), Proceedings of XXX World Congress of the International College of Surgeons; Bologna: Monduzzi Editore,775-779, 1996
	分担内容	(回)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文作成
	内容概要	免疫抑制剤および肝非実質細胞が肝細胞分裂に与える影響を調べた。肝細胞分裂は CYA あるいは FK506 処置群で有意に抑制され、内皮細胞の混合培養では分裂が促進されるのに反し、クッパー細胞の混合培養では分裂が抑制された。また、FK506 群の分裂抑制効果は内皮細胞との混合培養で回復したが、CYA の抑制効果は回復しなかった。
10	著者名(記載順)	Yamashita K, Furuya K, Sato N, <u>Namieno T</u> , Une Y, Nakajima Y, Matsushita M, Uchino J
	題名(和文題名)	Risk of needle biopsy applying to alveolar echinococcosis of the liver (肝エキノкокカス症の針生検の危険性)
	編者・書籍名・発行所(頁・年)	Abe O, et al (eds), Proceedings of XXX World Congress of the International College of Surgeons. Bologna: Monduzzi Editore,1825-1828, 1996
	分担内容	(回)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文の校閲・全面改定
	内容概要	肝エキノкокカス症は寄生虫の感染性疾患であるが、浸潤性の発育と脳・肺を初めとする遠隔転移をする疾患でもある。従って、悪性疾患と同様に針生検で寄生虫を播種する可能性について実験的に調べた。その結果は、予測どおり針生検で寄生虫の腹腔内播種・針刺入路への移植の危険性が高いことが判明した。
11	著者名(記載順)	武市紀年、 <u>波江野力</u> 、内野純一、小林博
	題名(和文題名)	LEC ラットにおける肝癌発症機構：病理
	編者・書籍名・発行所(頁・年)	内野純一 他 (編), 肝細胞癌-疫学・発癌・診断・治療- 札幌：富士書院, 59-70, 1989
	分担内容	(回)研究の統括 (月)研究計画の作成 (火)資料の評価・分析 (水)論文作成
	内容概要	肝炎・肝癌を自然発症する動物モデルである LEC ラットについて自然経過と肝癌への進行過程について概説し、臨床研究に資することを論述した。
12	著者名(記載順)	小井戸一光、長川達哉、 <u>波江野力</u>

研究業績一覧

作成年月日：平成 12 年 8 月 25 日

	題名	進行胆道癌の内視鏡治療；画像診断による胆管癌の治療方針の選択：一步進んだ PTBD [5]レーザー治療
	編者・書籍名・発行所（頁・年）	木村健（編），消化器診療プラクティス 11. 肝・胆・膵疾患の内視鏡治療の実際. 東京：文光堂, 95-97, 1995
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)論文の校閲・全面改定
	内容概要	胆道癌の進行例は、手術的適応から外れることが多く治療に難渋する。日常動作の改善と姑息的治療にも関わらず予後の亢進を意図して新しい治療法を開発した（レーザーサーミア）。この治療法を治療前後の内視鏡像を提示して解説した。
13	著者名（記載順）	小井戸一光、 <u>波江野力</u> 、長川達哉
	題名	第 IV 章 膵臓 G. その他の腫瘍
	編者・書籍名・発行所（頁・年）	竹原靖明 他（編），超音波消化器病学. 東京：南江堂, 398-405, 1996
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)論文の校閲・全面改定
	内容概要	膵の腫瘍性病変は典型的な病変像を呈するものが存在する反面、稀少疾患の存在診断・質的診断は困難をきわめるが、これら稀な膵腫瘍性病変の超音波像を実際の画像を提示して解説した。
14	著者名（記載順）	小井戸一光、 <u>波江野力</u>
	題名	胆道疾患に対する CT endoscopy
	編者・書籍名・発行所（頁・年）	税所宏光（編），膵・胆道疾患の新しい検査法（消化器病セミナー73）.東京：へるす出版, 73：153-162, 1998
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	胆道疾患に対する従来の内視鏡所見との対比で、仮想内視鏡の有用性と適応について画像を提示して解説した。
15	著者名（記載順）	小井戸一光、 <u>波江野力</u>
	題名	胆道内視鏡
	編者・書籍名・発行所（頁・年）	小俣正男 他（編），KEY WORD 2000-2001 肝胆膵. 東京：先端医学社, 172-173, 1999
	分担内容	(B)資料の評価・分析 (F)文献検索
	内容概要	胆道内視鏡について初学者の利便に供すべく平易かつ簡潔に定義と一般的事項について解説した。

(追補)

[Enhanced sonography using carbon dioxide gas for small hepatocellular carcinoma: a comparison study between pure carbon dioxide gas and carbon dioxide microbubbles.](#)

Koito K, **Namieno** T, Hirokawa N, Ichimura T, Nishida M, Yama N, Sakata K, Hareyama M, Nish M.

Radiat Med. 2005 Mar;23(2):104-10.

[Virtual CT cholangioscopy: comparison with fiberoptic cholangioscopy.](#)

Koito K, **Namieno** T, Hirokawa N, Ichimura T, Syonai T, Yama N, Mukaiya M, Hirata K,

Sakata K, Hareyama M.
Endoscopy. 2001 Aug;33(8):676-81.

[Survival-associated histologic spreading modes of operable intrahepatic, peripheral-type cholangiocarcinomas.](#)

Namieno T, Koito K, Takahashi M, Une Y, Yamashita K, Shimamura T.
World J Surg. 2001 May;25(5):572-7.

[Pancreas: imaging diagnosis with color/power Doppler ultrasonography, endoscopic ultrasonography, and intraductal ultrasonography.](#)

Koito K, **Namieno** T, Nagakawa T, Hirokawa N, Ichimura T, Syonai T, Yama N, Someya M, Nakata K, Sakata K, Hareyama M.
Eur J Radiol. 2001 May;38(2):94-104. Review.

[Congenital arteriovenous malformation of the pancreas: its diagnostic features on images.](#)

Koito K, **Namieno** T, Nagakawa T, Ichimura T, Hirokawa N, Mukaiya M, Hirata K, Hareyama M.
Pancreas. 2001 Apr;22(3):267-73.